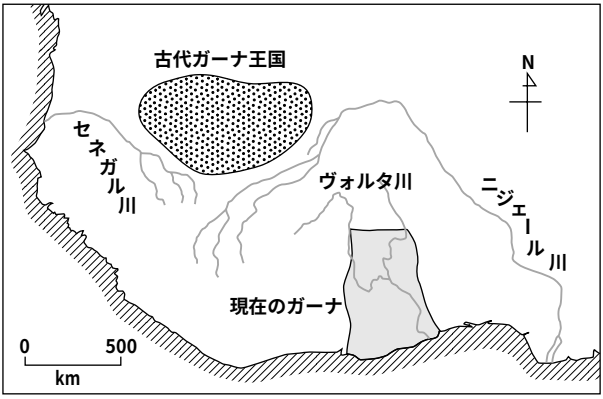
第Ⅱ部

現代ガーナ編

第4章 「名前」と「制度」

パイナップル畑で働く人たち

図16　古代ガーナ王国の位置



1　地名の由来

ガーナの国名

現在のガーナの国名は、九世紀頃から十一世紀頃にかけて繁栄した古代ガーナ王国からとったものである。古代ガーナ王国が栄えたのは現在のガーナよりもかなり北のサヘル地域で、ニジェール川とセネガル川にはさまれた一帯であった（図16参照）。ちなみに現在のマリの国名も、古代ガーナ王国の後に栄えた古代マリ王国の名をとったものである。「ガーナ」の名称はこの古代ガーナ王国の王の呼称であったといわれ、この王は「黄金の王」を意味するカヤ＝マガというもうひとつの呼称を持っていたという。

この古代ガーナ王国の王都は、王が居住する王宮を中心とした地域と、北アフリカ出身のアラブ人やベルベル人の商人たちが住む地域の二つから構成されていた。王宮周辺にはもともとこの地域で伝統宗教を信仰していた人々が居住していたが、商人たちが住む地域の人々はイスラム教を信仰し、町にはモスクも建造されていた。古代ガーナ王国はこの地域で産出された金を中心とした交易で栄え、王は交易をおこなう商人たちに課税もしていた。当時の王宮での見聞をまとめた記録によれば、王に仕える者たちは黄金の盾と剣を持ち、番犬は金の首輪をつけ、馬のつなぎ縄は巨大な金塊に結ばれていたという。現在のガーナも同じように金の産地で、かつて黄金海岸（ゴールドコースト）と呼ばれていた。古代ガーナ王国と現代ガーナは、豊富な金の産出に支えられて発展したという共通点をもっているわけである。

首都アクラの地名

ガーナの首都アクラには現在さまざまな地域の出身者が住んでいるが、この地域にもともと住んでいた人たちはガ人である。アカン語（チュイ語）ではガ人が住んでいる地域のことを「ンクラン」と呼んでおり、これが崩れた「アクラ」が英語読みの地名となったといわれている。ンクランとはアカン語で昆虫のアリのことで、大昔にガの人々が現在の居住地に集団で移住してきた際の様子が、アリの

大群の移動のように見えたことからこのような名が付けられたという。付けられた側のガの人々にとっては、あまり嬉しくない命名のようである。

ポルトガル語由来の地名

ポルトガル人が最初にガーナ沿岸部に到着した場所を「鉱山」（ミナ）と呼び、その名称が現在の「エルミナ」という町の名前にそのまま受け継がれていることは第1章で述べたとおりである。ガーナにはこの他にも、ポルトガル人によって命名された地名がいくつかある。例えばガーナ北部から東部にかけて流れ、現在では巨大な人造湖が造られているヴォルタ川（湖）もその一つである。エルミナで金の取引の可能性を確認したポルトガル人は、さらに他の金産出地を求めて東に航路を進めた。しかし新たな金産地を発見することはできず、ヴォルタ川の河口にさしかかったところで激しい海流のために行く手を拒まれ、それ以上東進することをあきらめて引き返した。このためポルトガル人はこの川を、「リオ・ダ・ヴォルタ」（ポルトガル語で「戻り川」）と呼んだ。そしてこの「ヴォルタ」が、現在でも川の名称として使用されている。[1]

地名になった人名

首都アクラには、「サークル」と呼ばれる環状交差点がいくつもある。[2]そしてそれぞれの交差点には、ガーナの歴史上の有名人の名前が付

けられている。ガーナ独立の父ンクルマの名は、いつも交通渋滞が絶えない中心街の「ンクルマ・サークル」に生きている。その二つ先の交差点は、ンクルマの政敵でンクルマによって投獄されて獄死した人物の名をとった、「ダンカ・サークル」である（第３章「１　ンクルマ時代――希望と挫折」参照）。またフェルナンド＝ポー島からガーナにカカオを持ち込んで栽培に成功した、テテ＝クワシの名を冠したサークルもある（第２章「２　植民地経済の発展」参照）。

しかし、これらの地名は、時の権力者の意向によってコロコロ変わる。「ンクルマ」と「ダンカ」の二つのサークルにはさまれた場所にある交差点がいい例だ。この交差点は、一九七二年にクーデターで政権をとった国家救済評議会が、その評議会名をとって「レデンプション（救済）・サークル」と名付けていた。しかしその後のローリングス軍事政権期に、この交差点は「サンカラ・サークル」と改名された。隣国ブルキナファソの軍政指導者トーマス＝サンカラが一九八七年にクーデターで殺害されたため、サンカラの盟友であったローリングスが彼にちなんだ名称をこの交差点につけたのである。その後ローリングス政権からクフォー政権になると、サンカラ・サークルは「アコ＝アジェイ・サークル」と命名された。アコ＝アジェイは、植民地期に独立運動を展開してンクルマとともに

投獄された活動家の一人である（写真⑫）。これら一連の名称の変更には、前政権のイメージを残した地名を一掃したいという各政権の意図が見え隠れしている。

コトカ国際空港

空の玄関口である首都アクラの国際空港は、「コトカ国際空港」と呼ばれている。この名称は、ンクルマ政権に終止符を打った一九六六年の無血クーデターの中心人物のひとり、コトカの名をとったものである。コトカはンクルマ政権後に設立された軍事政権の中で軍最高司令官となったが、一九六七年に発生したクーデター未遂事件の際にこの空港で殺害された。一九六九年、当時の政府は空港にコトカ将軍の記念碑を建立し、空港の名をコトカ国際空港と改称したので

写真⑫　ガーナで使われている１万セディ札には，独立運動を戦った６人の政治家（「ビッグ・シックス」と呼ばれる）が描かれている。このうちンクルマ（左上），ダンカ（左下），アコ＝アジェイ（中央下），オベツェビ＝ランプティ（中央上）の名は，環状交差点（サークル）の名称になっている。

ある。このように首都アクラの町中の地名には、ンクルマ初代大統領の名もあれば、彼に投獄されて獄死した政敵の名を冠した交差点、さらにはンクルマをクーデターで倒した将軍の名のついた空港まである。どう見ても一貫性があるとは思えないこれらの命名は、混乱にまみれたガーナの政治史の一端を如実にあらわしていると見ることもできる。

2　人名の由来

曜日と名付け

南部ガーナの多くの地方では、人の名前は生まれた曜日によって決まる。それぞれの曜日には次のように男女一人ずつの名前が決まっており、赤ん坊が生まれると、生まれた曜日によって名前が自動的に決まるのである。日本式にいうと、月曜日に生まれた男の子は「月雄」、女の子は「月子」というように命名されることになる。

（曜日）	（女子の名）	（男子の名）[3]
月曜日	アジョア	コジョ

火曜日	アベナ	クワベナ
水曜日	アクア	クワク
木曜日	ヤー	ヤオ
金曜日	アフィア	コフィ
土曜日	アマ	クワメ
日曜日	アコスア	クワシ

また曜日ごとの名前は人間だけでなく、各地の「川の神」や「地の神」にもつけられている。そしてたとえば、ある土地の「地の神」が木曜日生まれの女性の名「ヤー」と呼ばれている場合、木曜日の農作業は休みとなる。土を掘り返したり木を切ったりすることが、木曜日生まれの土地の神を怒らせると考えられているからである。

曜日対抗

この曜日ごとの区分は、普段の生活のなかでいろいろな形であらわれる。例えばガーナ東部のエヴェの人々の間では、小さなチャリティや催しごとがあったりすると、「生まれ曜日対抗」の資金集めがおこなわれる。にぎやかな太鼓の演奏と歌のなか、生まれた曜日ごと（つまり同じ名前ごと）に人々が踊りながら会場の真ん中に進み、カゴのなかに小銭をそれぞれ入れていく。こんな時、招待されていた外国人が意

味が飲み込めずにポカンとしていると、「おまえの順番はまだか」「いったいおまえは何曜日生まれだ」とせかされる。「自分の生まれた曜日なんか知らない」などといおうものなら、こいつは金を惜しんでケチなやつだ、ということにもなりかねない。

さてひととおり曜日ごとの集金が終わると、今度は急いで集計がおこなわれ、曜日ごとの募金金額の発表がおこなわれる。「月曜日生まれの合計金額は○○セディ！」（オーッという歓声）「水曜日は○○セディ！」と進んでいく。「最高は、金曜日の○○セディでした！」の発表に、再びワーッと歓声と拍手が起こり、勝った（？）金曜日生まれの人たちは音楽に合わせてまた踊り出す。そして踊っている人たちはみんな、「コフィさん」と「アフィアさん」ばかり、というわけである。

白人は日曜日生まれ

町を歩いていると、人なつっこい人々から「クワシ・オブロニ、こっちに来いよ！」と声をかけられる。「オブロニ」とは白人のことで、「クワシ」は日曜日生まれの男性の名である。どうやら、白人は日曜日生まれということになっているらしい。

一方ガーナの子供向け昔話に登場するキャラクターで、「蜘蛛のクワク」というのがある。クワクという蜘蛛が何か悪いことをして、結局皆にこらしめられる、というのがこの

昔話のパターンだ。この話で悪事をはたらく蜘蛛は、なぜか水曜日生まれの「クワク」である。なぜ白人は日曜日生まれで、蜘蛛は水曜日生まれなのか。この質問をガーナの人にぶつけてみると、大笑いしながら次のように説明してくれた。それぞれの曜日生まれの名前には、人間の性格に関するステレオタイプのようなものがついてまわる（ちょうど日本で、血液型がB型の人は変わり者で、A型の人はきまじめ、といわれるようなものか）。白人の性格はクワシがぴったりで、蜘蛛はクワクなのだ、と。わかったような、わからないような説明だが、要するに曜日をもとにした名前には、人の性格に関するイメージがついてまわるということのようだ。

もうひとつ、白人の見られ方の例を紹介しよう。田舎に行くと、白人を見た子供たちが次のようにはやし立てるのをしょっちゅう耳にする。

オブロニ・ココー、マーチン！

ヤー、ヒチリ、ゴンゴン！

（赤い白人、おはよう！

おはよう、擦って皮剥けて、ゴンゴン！）

ここでは白人の肌の色は「白い」のではなくて、「赤い」と見られている。ある古老の

説明によると、白人が赤いのは肌を何かで擦ったために皮が剥けて赤くなったからだということで、このような言い方になったのだろうとのことだった。言われてみると、ヨーロッパ系の人々が日に焼けると、確かに肌が赤く見える。

アクアバ人形

首都アクラの土産物屋や博物館などでは、アクアバ人形という独特の形をした人形をよく見かける（写真⑬）。アクアバは「アクアの子」という意味で、アクアは水曜日生まれの女性の名前である。昔は妊娠中にこの人形を持っていると、人形のように首が長く形の良い頭を持った（つまり将来は美男美女になる）子供を生むことができると言われていたようだ。逆に妊娠中に醜いもの（猿の顔や醜悪な彫刻など）を見ると、同じように醜い赤ん坊が生まれるので、見ない方がよいとされていたらしい。他にも妊娠中のタブーが昔はいろいろあったらしく、妊婦がハチミツやサトウキビなどの甘いものを食べたり、木の上から赤色のアリが妊婦の上に落ちてきたりすると、流産すると信じられていたようだ。[4]

写真⑬　アクアバ人形

双子人形

ガーナをはじめ多くのアフリカ社会では、双子は特別な存在と考えられている。そのためか、南部ガーナでは双子が生まれた際につける名前は「アタ」または「アター」と決まっている。ガーナでこの名前の人がいたら、双子の一人だと思ってまず間違いない。

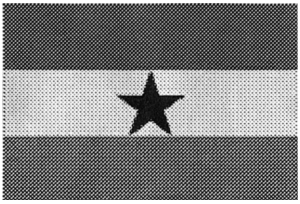
先述のアクアバ人形と並んで、「双子人形」なるものも土産物屋や博物館で見かけることがある。これは双子が何らかの理由で亡くなった場合につくる人形である。双子が亡くなった後、家族はこの人形を子供とみなして共に暮らす。双子のうち片方だけが亡くなった場合もこの人形を作り、生き残ったもう一人の子が外で遊ぶときには人形も外に出し、食事の時もとなりに置く。死んでしまった子も、生きているもう一人の兄弟姉妹と同じように暮らせるようにするわけである。

双子に限らず、今生きているものと亡くなった親族とが常にいっしょにいるという感覚は、ガーナでは自然なものだ。ふだん酒を飲む前に、祖先のために一滴地面に垂らす光景は日常的に見られるし、祭や祝い事、葬式の際も祖先に酒が饗される。仏壇に祖先の位牌をおいて食べ物を供える、日本と同じ感覚である。

3　シンボル

国旗

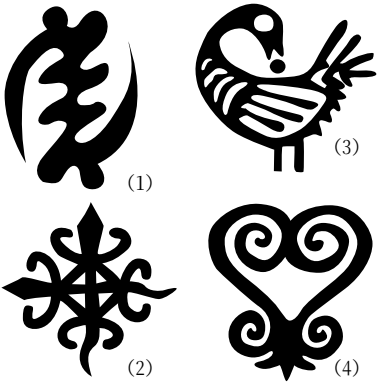
ガーナではさまざまな場面で多様なシンボルが使われる。そしてそれぞれのシンボルには意味がある。最もよく目にするのは国のシンボル、国旗である。赤、黄、緑の三本の線の上に黒い星をあしらったこの国旗（写真⑭）は、一九五七年の独立時に正式に採用された。使われている色のうち、赤は独立のために流された血を、黄は金に代表される豊かな鉱物資源を、緑は豊かな森林をあらわしており、黒い星は植民地支配からのアフリカの独立を象徴している。サハラ以南のアフリカで植民地支配から最初の独立を果たしたガーナは、当時アフリカの未来への希望を象徴する「黒い星」そのものであった。しかしその希望と現実との間には、埋めがたい大きなギャップがあったことは第3章で見たとおりである。



写真⑭　ガーナの国旗

アディンクラ

ガーナではいたるところで「アディンクラ」とよばれる伝統的な紋様を見かける。それぞれの



挿図7　アディンクラ模様――(1)「ジェニャメ」（神を除いては）(2)「フントゥムミレク＝デンチェムミレク」（双頭のワニ）(3)(4)「サンコファ」（戻っていって得よ）

紋様には意味があり、紋様はその意味にふさわしい場面で使われる。最もよく見かけるのは、「ジェニャメ」（神を除いては）の紋様である（挿図7）。その意味は「太古の昔におこった創世のありさまを知るものは誰もいない。この世の終わりを見届けるものも誰もいない。ただ一人、神を除いては」というもので、神の偉大さと全能をあらわしている。この紋様は教会でよく見かけるほか、家の玄関のドアに彫り込まれたり、衣服をつくる布の柄として使われたりしている。

アディンクラの紋様のなかには、人生訓的な示唆深いものある。たとえば胴体が一つなのに、頭が二つあるワニをかたどったもの。これは、二つのワニの口が食べ物をめぐって争っても、結局同じ胃袋におさまる様子を描いている。最終的な目的は同じなのに、その

過程でお互いにいがみ合い争いを起こすことは愚かしい、という平和と協調の重要性をこの紋様は示している。

日本のことわざに似ているアディンクラもある。鳥が後ろを振り返っているさまをモチーフにした、「サンコファ」がその例だ。サンコファは直訳すると「戻っていって得よ」という意味で、過去の出来事や経験を学ぶことによって現在や未来の糧とせよ、という教訓を示している。日本でいう、「故きを温ねて新しきを知る」そのものである。

政党ロゴ

ガーナの政党はそれぞれロゴマークを持っており、これにもまた意味がある。たとえば一九九三年から八年間にわたって政権党であった国民民主会議（ＮＤＣ）は、「アカタマンソ」と呼ばれる傘を党のシンボルに使用している（挿図8）。「国を覆う（治める）」という意味のこの傘は、もともとは伝統首長の象徴で、昔も今も伝統首長が公衆の面前に姿を現すときにはこの傘が必ず登場する。この伝統的なシンボルを使うことによって、自分たちの党が国を治めるのに最もふさわしいことを

挿図８　政党のロゴ――
右：国民民主会議（NDC）
上：新愛国党（NPP）

強調しているわけである。

一方、二〇〇〇年末の総選挙で与野党逆転を果たして政権についた新愛国党（ＮＰＰ）は、象を政党のシンボルに採用している。これはガーナのことわざ「象の後についていけば森の露に濡れることがない」にちなんだもので、新愛国党がガーナを先導すれば後についてくる国民は安泰である、という意味が込められている。また象は、偉大さ、強さ、知能の高さ、愛情深さなどを象徴するシンボルとして使われ、そのイメージをそのまま政党のイメージとして使っている。

ちなみに十九世紀初頭にはじめてアサンテ王と接触したイギリスの使節団は、伝統首長のうしろに大きな傘がたてられ、傘の上には象をかたどった彫り物がのせられている様子を描いている（第1章　扉の絵を参照）。現ガーナの二大政党は、傘と象という、いずれも伝統的な統治と権力の象徴を拝借して党のロゴマークとしているわけである。

4　政治体制

憲法　現代ガーナのありかたを規定している憲法は、一九九二年に制定されたものである。この憲法は全部で三〇〇条近くある非常に長いもので、一冊の本ぐらいの分量がある。憲法では、基本的人権、政党結成の自由、言論の自由の保証が謳われているほか、軍、警察、行政、伝統首長の役割、地方分権などについて多岐にわたる条項がもうけられている。以下ではこの憲法に規定されている、ガーナの基本的な政治体制について見てみよう。

アメリカ型の大統領制　ガーナの政治体制は、大統領に強い権力を認めるアメリカ型の大統領制に近い。大統領は国家元首であると同時に、軍の最高司令官でもある。その任期は四年で、再選されれば二期八年までは務めることができるが、大統領を二期務めたものはその後大統領になることはできない。

ガーナの大統領は、十八歳以上の国民の直接投票によって選出される。選挙では有効投票数の五割を超える票を得たものが大統領に当選するが、一回目の投票でそれだけの票を

得たものがいない場合は上位二名による決選投票がおこなわれ、得票数の多い候補者が大統領となる。大統領は議会の同意のもとに、一〇～一九人の大臣を選出する。

小選挙区で選ばれる国会議員

ガーナの議会は、定員二〇〇名の一院制である。国会議員は、国内に二〇〇ある小選挙区から一名ずつ選出される。ただし憲法では、国会議員の定員を「一四〇人を下回らない数」としているだけで上限を定めていないため、議員定数の変更が今後おこなわれる可能性はある。各選挙区から国会議員に立候補できるのは、過去一〇年間の間に少なくとも五年以上その選挙区に居住していた、二十一歳以上のガーナ国籍をもつものに限られる。国会議員の任期は四年で、国会議員選挙は大統領選挙と同時期におこなわれる。

国会は半数以上の議員の出席で成立し、法案は出席議員の過半数の賛成をもって可決される。大統領は国会で可決された法案に対して拒否権を発動できるが、その法案が国会での再審議の末に三分の二以上の賛成で可決された場合、大統領はこれを承認しなければならない。

政党活動

政党活動の自由は憲法で保証されている。ただし政党結成に際しては選挙管理委員会への届け出が必要で、次のような厳しい条件がつけられている。

①　特定の地域・宗教・エスニックグループに基づいた政党でないこと。また、政党の名称、党のシンボルマークなどに、特定の地域・宗教・エスニックグループを連想させるものが含まれていないこと。

②　国内に一一〇ある全ての地区（District）に、政党の創設メンバーがいること。

③　国内に一〇ある全ての州（Region）と、一一〇の地区の三分の二以上に、それぞれ政党支部を持っていること。

これらの条件は、政党政治の名の下で国内での地域主義、エスニックな対立、宗教間の対立などが顕在化することを避けるためにもうけられたものである。

現代政治と伝統首長

過去の植民地時代、宗主国イギリスはゴールドコーストでの間接統治を効率的に進めるため、伝統首長を中心とする首長制度を利用して首長たちに一定の政治権限を与えていた。現ガーナの憲法は伝統首長制度の存続を保証し、政府・国会は伝統首長の即位・退位に干渉しないことを明確にしている。他方、伝統首長が政党活動に関わることは、憲法により禁じられている。また伝統首長が国会議員選挙に出馬する場合、その人物は伝統首長の座から退かなければならない。これら憲法の規定の背景には、伝統首長が政治に関与することにより発生する、地域間の対立やエス

ニックグループ同士の政治的抗争を未然に防ぐ意図がある。なお、公務員である者が伝統首長となることは禁じられていない。

5　ことば

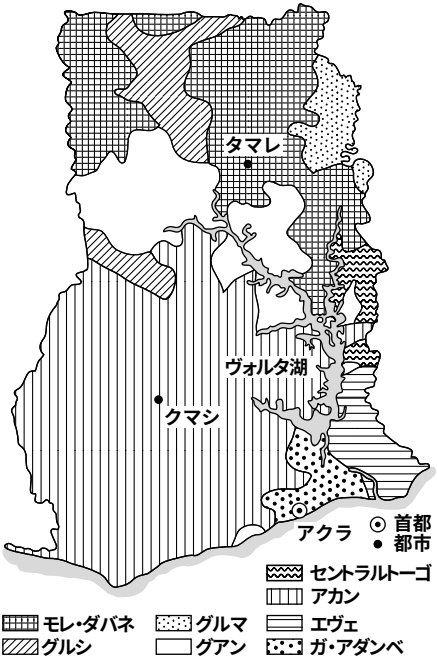
多言語社会　ガーナには何種類の言語があるのだろうか？この問いに答えることはとても難しい。言語学的な分類によれば、ガーナには図17のように八種類の言語グループが存在していることになる。しかしこの学術的分類は、日々の生活実感とは必ずしも一致しない。例えば、図では一つの言語グループとしてまとめられているアカン語（チュイ語）には、数多くの「方言」があり、「標準アカン語」というのは存在しない。同じアカン語でも、西部国境付近に住むセフィ人やンゼマ人が話す言葉（方言）は、中南部に住む同じアカン語を母語とする人々にはほとんど通じないほど異なっている。このようなさまざまな「方言」も含めて数えていくと、ガーナで話されていることばはかなりの数にのぼる。ガーナは公用語として英語を採用しているが、このような多言語状況を背景にして、国営

ラジオやテレビでは主要地方言語（アカン、エヴェ、ガ、ンゼマ、ダバネ、ハウサなど）による番組が組まれている。

多移動社会

ガーナはまた、多移動社会でもある。教育や就労の機会を求めての、農村部から都市部への移動は無論のこと、農村部から農村部への移動も活発である。後者の農村間移動が活発な理由は、いくつかある。ひとつは、南部の沿岸地帯の人口密度が高く、そのため一人当たりの耕作面積が矮小化してきていることである。この地帯に住む農民が十分な土地が得られない場合、

図17　ガーナの言語分類



土地が比較的豊富にある中部森林地帯に移住し、そこで土地を取得して換金作物のカカオなどの栽培をはじめるケースがある（第2章「コラム5」を参照）。もう一つは、気候条件や土壌条件が悪いガーナ北部の農村部から、より条件がよく労働力需要も大きい南部の農業地帯に人々が移動してくるケースである。このような農村間の移動は全国的な現象で、国勢調査によれば農村人口の約一五％が他州の生まれであるという結果が出ている（ガーナには一〇の州があり、二〇〇〇年時点での総人口は約一八八〇万人である）。

農業の条件が悪い北部の農村から豊かな南部の農村に移ってきた移住民の成功物語を、ブカリさんという男性農民の例からみてみよう[5]。彼はガーナ北部、ブルキナファソとの国境近くに生まれたフラフラ人である。ガーナが独立して間もなくの一九五八年ごろ、まだ十代半ばの少年だったブカリさんは、生まれ故郷を出て働き口を求めて南部のカカオ生産地帯にやってきた。当初彼はカカオ生産がさかんなある村に住み込み、そこで農業労働者として六年間働きながら貯金に励んだ。そして彼はその金で地元の伝統首長から土地を購入し、自分自身のカカオ畑を作り始めた。これと並行して彼は、近隣の村に住む地主から土地を借り受けて、別のカカオ畑を造成する。カカオ畑を作り始めて一二年目、地主はできあがったカカオ畑の半分をブカリさんに譲渡することに同意してくれた。こうして無一

文の若い農業労働者だったブカリさんは、二つのカカオ畑をもつ自作農になることができたのである。未利用の土地が豊富にあった一九六〇年ごろまでは、このように移住によって自らの土地を手に入れ成功する農民がたくさんいた。

6　教育

学歴競争社会

ガーナは学歴競争社会である。よりよい高校、そして国内に数校しかない大学に進学させるため、親は子供を小学校の時から有名校に通わせる。有名校の入学競争率は当然高く、また学費もかなりの額にのぼる。また時には子供が生まれてすぐに入学登録をしておかないと、希望者がいっぱいで優秀な成績でも有名校に入れない場合もある。

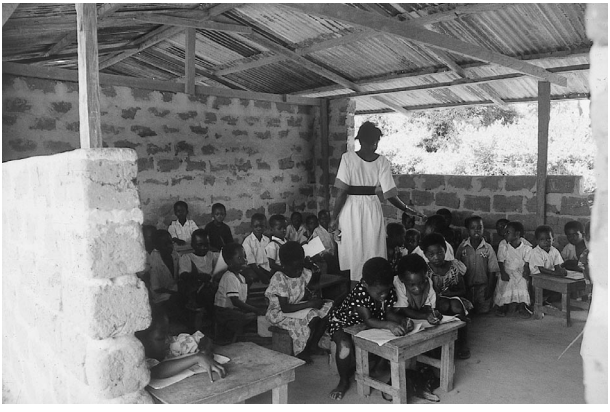
ガーナの教育制度は日本と同じ六・三・三・四制で、小・中学校の九年間が無償の義務教育となっている。義務教育のあと高校まで進む学生は多くなく、さらに大学に進学することができるのはほんのわずかである。

教育格差

都市部の富裕層が子供を有名校に入れるためにしのぎを削っている一方で、農村部の教育環境は劣悪である（写真⑮）。教育の質の面でも都市部との格差は驚くほど大きく、中学校まで通っても読み書きができない人が農村部では珍しくない。義務教育は無償であるが、さまざまな名目で学校からお金が徴収されるため、これが経済的負担になって途中で学校に通うのをやめてしまう子も多くいる。また女子学生の場合は、妊娠のため学校を中退する場合もよくある。

就職難

例え教育を受けても、安定した職に就ける保証はない。ある村に住む父親は、息子を高校に通わせる費用を捻出するために土地を売却した。私はガーナの農村で四〇



写真⑮　農村部の小学校。机や椅子の数も十分ではない。

○人以上の農家の人から聞き取りをしたが、土地を売ったことのあるのはこの人だけだった。大事な土地を手放してまで子供に教育を受けさせたい気持ちは、農村部の親も持っている。しかしその金で高校を卒業した息子はといえば、職がなくブラブラしているだけだという。多くの庶民にとって高等教育は夢だが、その夢のあとに安定した職業が保証されているとは限らないのである。

寄宿生活

イギリス式の教育の影響を強く受けているガーナでは、中学・高校では生徒が寄宿生活をおくる場合が少なくない。寄宿舎の規則は非常に厳しく、また教師の言うことは絶対である。また有名校のなかには、町から離れた山の中に校舎と寄宿舎を構えているところもある。

そのような寄宿生活を送っている娘を持つ友人が、お金を届けるというので寄宿舎まで車で送っていったことがある。しかし車は学校のゲートより先には入れてもらえず、父親である彼でさえ娘に直接お金を手渡すことを断られた。彼は仕方なく教師の一人にお金を託し、娘の顔も見ずに帰らなければならなかった。その時の彼の残念そうな顔が忘れられない。このようないわば隔離された環境のなかで、生徒は学期のあいだじゅう勉学に集中するのである。

7　女　性

ガーナの女性

ガーナの女性は元気だ。青空マーケットで商売するおばちゃんや、重い荷物を頭に載せて畑から帰ってくる女性たちは、みなたくましく笑顔が魅力的である。しかし彼女らの生活にはいろいろな困難がつきまとう。憲法上は男女の平等が保証されているガーナではあるが、実際はさまざまな場面で女性は不利な立場に置かれているからだ。教育を受ける機会はその顕著な例であり、表のように、就学経験のある成人の割合は男性より女性の方が明らかに低い。また低年齢での妊娠も大きな社会問題になっており、これが中途退学の原因や就業の妨げともなっている。

女性の経済的立場

ただし、教育や就業の機会が男性と比べて相対的に制限されているからといって、ガーナの女性の多くがいわゆる専業主婦化して夫の収入に依存しているというわけでは決してない。むしろ、夫の収入とは別に（あるいは夫の収入があてにできないために）、女性は何らかの独立した現金収入源を持ち、その収入によって家計を支えている場合が非常に多い。また日本のように一家で一つの貯金通帳を共

有するという家計管理は一般的ではなく、夫婦がそれぞれの収入を自身で管理している場合のほうが多い。

このように経済的に自立した（あるいは自立せざるを得ない）ガーナの女性の現状は、女性が世帯主となっている世帯の数の多さに、はっきりと現れている。ある調査によれば、離婚・死別・夫との別居などのさまざまな理由で男性の世帯主がおらず、女性が世帯主となっている世帯は全体の約三〇％を占める。また夫がいても経済的支援をしないため、妻が事実上家計の責任を担っている世帯を含めると、その割合はさらに多くなるという。夫の収入に依存せず、経済的に一定の独立性を持った女性が多いことをこの数字は示している。

就学経験のある成人の割合

（%）

州	就学経験のある成人	
	男性	女性
西部	88.3	63.6
中部	80.6	57.5
グレーターアクラ	92.6	79.1
ヴォルタ	82.7	58.5
東部	86.6	65.1
アシャンティ	90.2	72.1
ブロン=アハホ	84.4	61.9
北部	46.0	22.5
アッパーウエスト	53.6	34.8
アッパーイースト	53.7	16.9
合計	79.2	59.6

（出所） Ghana Statistical Service, *Ghana Living Standards Survey: Report of the Fourth Round (GLSS 4)*, Accra: 2000.

女性の労働負担

現金収入を得るためのさまざまな労働に加え、女性たちは家事労働も一手に引き受けて、超多忙な毎日を送っている。ハウスメイドを雇う

ことのできる一部の裕福な都市生活者をのぞいて、多くの女性は家事労働に一日の時間のかなりの部分を割かなければならない。

日本では電気洗濯機と電気炊飯器の普及が、女性の家事労働の負担を劇的に軽くしたが、ガーナでは無論これらはほとんど使われていない。そのため特に農村部では、毎日の家事をおこなうための水くみ、燃料用の薪集め、食事の下ごしらえ（人力による製粉など）は、かなりの重労働だ。そしてこれらの労働は、ほとんど女性に割り当てられている。この労働負担は、女性の一日の労働時間を相対的に長くしており、同時に現金収入を得るための活動に費やせる時間を大幅に制限している。

子供は何人が理想的か？

家事労働とともに、昔から女性の重要な役割とされているものに育児がある。昔から多くの子宝に恵まれることは女性の誇りであり、また親族の繁栄と、畑で働く将来の労働力を保証するものであった。しかしこの伝統的な考え方も、特に都市部で働く女性の間では変わってきているようだ。この変化を、オブアシという炭坑の町で働く女性に対する、新聞のインタビュー記事から拾ってみよう。[6]

グラディー・アコツ（二六歳、ウエイトレス）

「私はまだ独身だけど、子供は二～三人でそれ以上はいらない。自分がちゃんと面倒見れないほどの数の子供を持ってどうするの？　私は七人兄弟の二番目だけど、経済的理由で専門学校を二年で中退しなければいけなかった。私の両親がもう少しお金持ちだったなら、私は今こんなところで働いていなかっただろうと思うわ」。

ベアトリス・コランテン（四三歳、電話交換手）

「私は子供が二人だけれど、これ以上いらないわね。この国の今の経済状態を考えたらこれが限度よ。私の両親は九人の子供をもうけたけれど、父が早くに亡くなったために、母一人で皆を育てなければならなかった。この経験があったから、私は結婚したとき子供は二人だけでいいと神に祈って、それが聞き入れられたのよ。農作業の人手にするためにたくさんの子供を産んだ時代は、もう終わったと思うわ」。

注（1）　川田順造『無文字社会の歴史――西アフリカ・モシ族の事例を中心に』岩波書店　一九

九〇年　二九六ページによる。

（2）　他の国では「ラウンドアバウト」「ロータリー」などとも呼ばれている。

（3）　地方によって、多少違いがある。例えばコジョはクオジョ、クワクはクウェク、クワベナはクワビナなど。

（4）　Rattray, R. S., *Religion and Art in Ashanti*, London: Oxford University, 1959 (1927), p.54による。

（5）　筆者によるカカオ生産地帯での調査から。調査の結果は、高根務『ガーナのココア生産農民――小農輸出作物生産の社会的側面』アジア経済研究所　一九九九年に詳しくまとめてある。

（6）　*The Mirror* 紙、一九九五年四月八日。